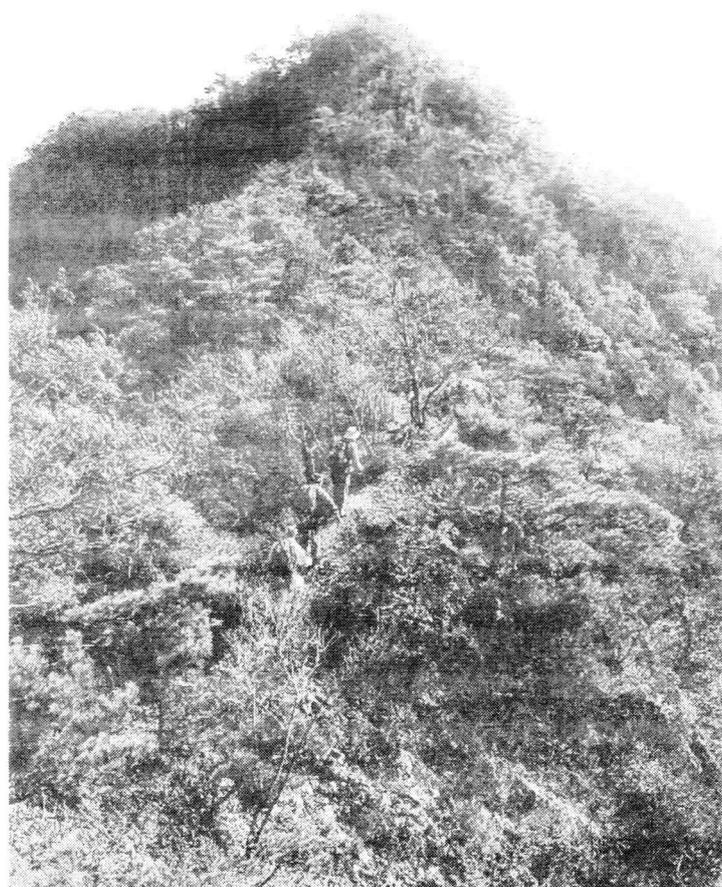


西播磨の名峰「七種山(ナクサヤマ)」



七種山三山

岩稜を行く



鉄塔付近にて



さわやかな杉木立の中



メール宅急便「特別寄稿」



カラコルムトレッキング

15期 舟田 節子

カラコルムトレッキング

(ディラン・ラカポシ・ベースキャンプとメルヘンの草原 11日間)

平成17年8月5日~15日

記録係：15期 舟田 節子

◆メンバー

長岡 正利	11期	国土環境協
長岡 礼子		小学校教員
上村 人史	"	日立ソフト
舟田 節子	15期	塾指導者
Y		国土地理院OB

“中央アジアの屋根”カラコルム。世界第2の高峰K2をはじめ8,000m峰が4座、7,000m峰なら実に60座以上もある白い巨峰また巨峰の世界です。東のネパールヒマラヤと並ぶ世界的スケールの豪快な大山脈であり、8,000m峰の数でこそ一歩譲るものの、高峰の密集度ではむしろネパールヒマラヤを凌いでいます。さらにカラコルムは極地帯を除けばもっとも長大な氷河が発達している地域です。

また、カラコルム山脈は中央アジアの5つの国が会う要に位置しています。延々550kmの長さで連なるこの大山脈を越えて南のパンジャブ平原と北の中央アジア高原とを結ぶルートは、古くからシルクロードのひとつとして、また、インドから中国を経て遥か日本へ至った仏教伝来の道として、あるいは紀元前4世紀のアレキサンダー大王の遠征など征服者の路として、南北双方からの数々の異なった民族や文明の足跡が刻まれた舞台であり、興味は尽きません。

◆プロローグ

「キリル文字というのは、ようするに発音記号でして…」

なんと、KUWV・OB会初海外遠征PWは格調高く、ロシア文字のレクチャーから始まった。

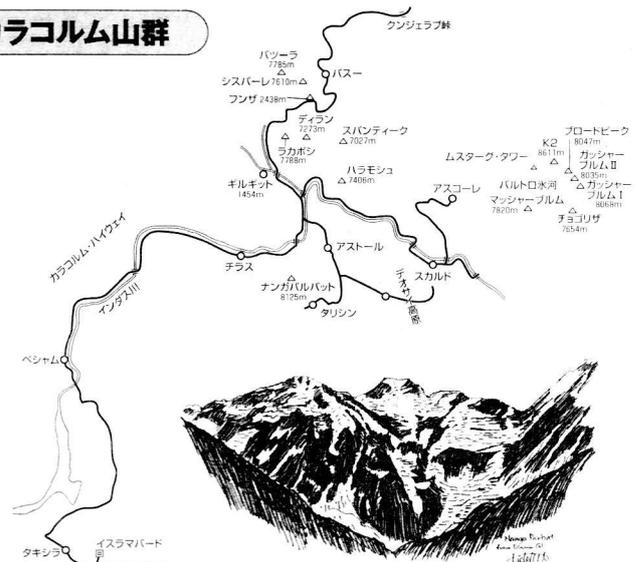
当然というか、必然というか、PW参加者には予習用に、長岡先輩ならではの各国製の新旧カラコルム地図が惜し気もなく送付されてきたのだが、「豚に真珠」＝「節子に地図」。カタカナ地名でも覚えきらんのに、アルファベットまでカバーできる訳がない。でも余りに申し訳なくて、前日、やっとこさ貼り合わせ作業だけは終わらせて、さも勉強したふうに持参した。このあたりから、気分はもう苦学(＝綱渡り)の現役時代に戻ってしまっている。

幸いに、上村先輩は私と同じレベルのようであり、地理院OBのY氏の方は、さすがに楽しそうに眼鏡をずり上げておいでた。そして礼子奥様の方は

「私の部屋も、娘の部屋にも集めた地図がはみ出して、地図さえ前に置いておけば、何時間でもじっと眺めて楽しんでいるのよ！」どおり、あまた始まった…のため息が漏れているようだった。

ともあれ、最初は長岡ファミリーの家族旅行として企画されていた「ディラン・ラカポシ・ベースキャンプとメルヘンの草原11日間」。単価引下げも兼ね、カラコルム入門コースとしてワンゲルOBにも公募の結果、当初の成年お子様達は所用で抜けてしまい、上記5名の参加に落ち着いたのだった。

カラコルム山群



(アルパインツアーカタログより)

私はといえば、「夏休みにはバルトロ氷河(カラコルムのK2を見る)トレッキングを」と狙っていたが、さすがに26日間の留守にはいくつものハードルがあった。無理の結論が出そうで、「同じカラコルムなら」と、即日決定してしまっていた。その後は「入門コースで楽」と、誘うのも功德のうち(?)とばかり周囲に声を掛けてみたが、みなさん「孫が生まれそう」「主人の留守と重なる」「老親入所の手続き中」などの都合があり、「会社の休みと微妙にずれる」もあった。かえって今、自分がいかに「行け」とばかりに青信号が連なっている状態なのかを自覚することになった。「行ける時が、行き時！」

それにしても、5月にシッキムに出掛けたばかりで、身辺整理は済み、医薬品他買い足す物

もなく、息子に学研を任せていくマニュアルも出来上がっていてわずかな手直しで済んだ。一度ハードルを越えてみればこんなに楽になる！そんな余裕プラス、メンバーは先輩とあって、対人緊張もない。本当に、本当にPW気分で、成田のカウンターに立った。

(なお、この記録は長岡Lの校閲を受けています。*が長岡Lから指摘があり、KUWV・OBの知的向上のため加筆した箇所です)

◆8月5日 成田→イスラマバード

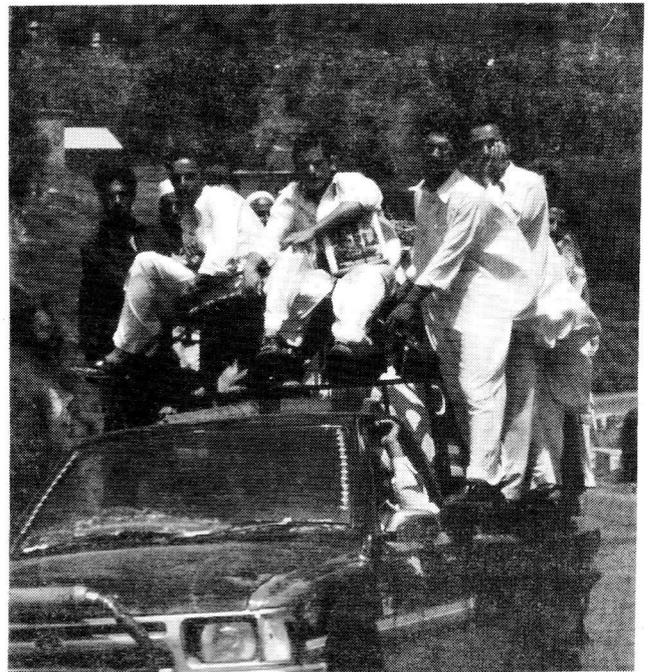
パキスタン航空は、成田の駐機料が高いためトンボ返りで、離陸。以前は楽しめた夕映えのカラコルム、朝焼けのカラコルムは、そんな事情で拝めなくなったのだという。ともあれ、お愛想もなく機内食が配られ、続いては「窓を閉めろ」(食ったらさっさと寝ろ)と、威圧的で、あまりサービスをされている側の気がしない。(イスラム国のため、ビールやワインが出なかったのも、そう感じた遠因…)

ジェットはほぼ真西に飛んでいる。かいま見る下には沙漠(*砂漠ではない。→ほとんどは砂ではないのが理由。)が広がり、次には天山山脈らしい雪山が流れ、そして夕映え色の雲海になる。その夕映え時が、西に向かって飛ぶために長々と続く。それがいよいよ暮れなずんだ頃、稲光に山のシルエットが浮かぶようになった。ジェットから雷ってこう見えるのかと、感心しているうち高度が下がり、イスラマバードへ。

ムツとくる熱気。そこに稲光が加わる。ど晴天の地と思い込んでいたので、この驟雨にはびっくり。出迎えの群衆を抜けた所で、ガイドのベイグさん登場。長岡さんご指名のガイドだ。今年は天候不順、昨日から荒れているようだ。夜10時を過ぎても人気の多いホテルの入り口には、金属探知機が据えられていた。奇数人数とあって、追加料金なし(個人的には)で私はシングル部屋なのである。ラッキー！

◆8月6日 専用車にてチラスへ

今日は一日、コーチに乗る。知らない国のウォッチングは楽しい。服装から、車から、市場



から、流れる景色はすべて異国だ。SUZUKIやTOYOTAが後ろに大書きされていて、多いだけでなく、ステイタスでもあるよう。そんな文字をご丁寧に刺繍して飾っている車まであった。すし詰めに乗った車の、さらに上に、後ろに、人がぶら下がっている。あれも料金を払っているのだろうか？満艦飾のバスにトラック、小型タクシー。そんなカラフルトラックは、絵はがきにもなっていた。

車窓を流れる果実の山がおいしそうで、ベイグさんに買ってもらった。こんなことを自由に頼めたり、好きな所で写真撮影に停めてもらえるのも、少人数個人手配旅行の醍醐味だ。

歩いているのもたむろしているのも男ばかり。わずかな女性達はほぼベールをかけている。買物も男の仕事で、基本的に女性は家の奥にいるものらしい(日本もとりにあえず「奥様」の言葉はある)。私…国の外まで出てきてるわよ！

水田地帯をぬけ、谷が深くなってきた所で、インダス河との合流地点に出る。圧倒的な水量。さすがにインダス文明を刻んだ悠久の大河だ。この灰色の泥水は氷河に由来し、削られた岩石粉末のためだそうだ。タコット橋を渡ってからカラコルムハイウェイとなる。主に中国が、ここからカシュガルまで、辺境の大動脈として建設した車道である。建設記念碑はかなり走ってからあった。

舗装道路の路面はもう傷んでいて、揺れるはガーンと突き上げるは…。追越すのを当然に飛ばし走る道路には、ほとんど橋はない。あらゆる谷を奥深く入り込んでから曲がる。「犀川ダムの手前の切れ込みなんて、かわいい」で通じてしまうのが今回のメンバー。どうしてチラスまで11時間もかかるのか？が、納得できた。

チラスの宿はハイウェイ沿いに建っていた。昔から熱気たまる盆地で有名な所とか。部屋の冷房は、天井プロペラと壁の水冷式扇風機。贅沢はいえないけれど、器具の騒音がきつい。

◆8月7日 →タトー村→メルヘンの草原

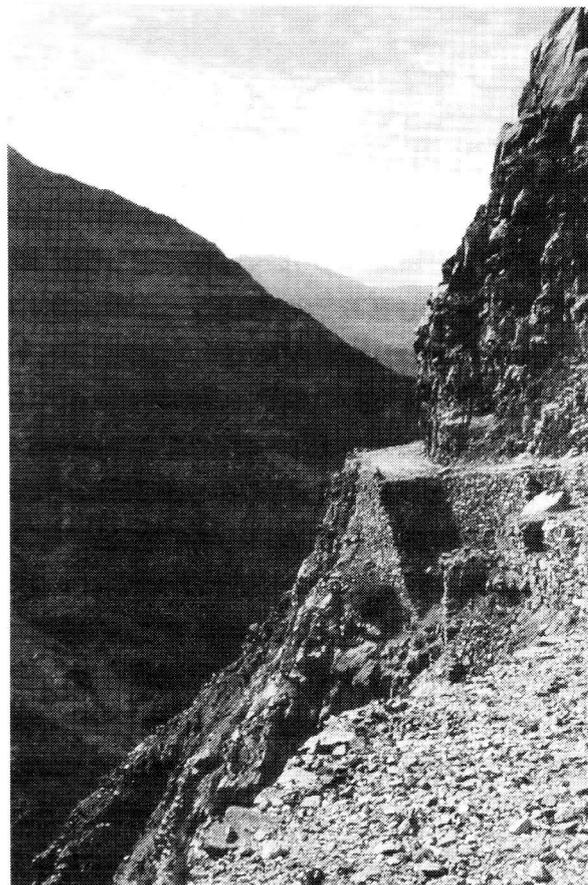
みんな早起き。トレッキングの今日は少しでも早出がいい。でもベイグさんは言った。「早出でランチボックスを頼むと、夜の残り物をいれられてしまう。朝食後なら、朝作った物を入れるから安心です。」なるほど。

河原の壁画に寄った。仏像と宝塔の線刻だ。こんな荒涼の地に昔往来した人々。そこまでの信仰があって、どうして仏教は滅び、イスラム教に変わってしまったのだろうか？三蔵玄奘が西域を旅した時には、丁度仏教の隆盛時代で、王侯諸氏に丁重にもてなされ送迎も受けたらしい。イスラム教に変わり、揺り戻しもなかった点からいえば、この風土に真に嵌まった教えがイスラム教であったのだ。ただ、私達の旅行中には礼拝する姿は一人しか見掛けず、夜明け前のアザーン（*「お祈りにいらっしゃい」のスピーカーの声）も、イスラマバードでの朝、かろうじて聞こえたぐらいだった。

インダスはひたすら滔々と流れる。長岡先輩からは予習の本まで送って頂いていた。その井上靖も同行したという『カラコルム紀行』には、インダスの流れを、いろいろな副詞で表現してある。予想はつくが読めない副詞もあった。インターネットで何でも調べられる、遊べる一方で、文語体のポキャブラリーは欠けていってしまう。でも、そういった言葉に置き換えられなくても、自分の目で見た感動は、ナマで入り込む。「百聞一見にしかず」が、旅へと駆り立てる。

造山運動は、その摩擦熱での温泉ももたらすとのことで、道路脇のどうともない流れが温泉だった。禿山にするくらいなら、こんな熱源も活用すれば？だが、灌漑用以外の水資源は関心がもたれていないようだった。

荒涼の中の点景ともいえるライコット橋を渡り、ここからジープに乗り換える。かつて、パキスタン軍のある高級軍人が、木材搬出のためこの谷奥まで車道をつけたとのことだった。最初から内臓もひっくり返りそうな揺れだったが、それが緩い斜面をトラバースした後は、とんでもない絶壁をつたうようになる。ガードレールがないのはともかく、石に乗り上げた弾みで簡単にコロンといきそうな…。遮る物もない展望とはこのことか、全開放のジープの前も下も、剥出しの大地が傾いている。路肩はすべて石積みで、パキスタン人は、伝統的に石積みが上手とのことだが、あのわずかな出っ張りがいつ崩れたっておかしくはない。そのうえに前走車が停止。ん？と思ったら、運転手が下りてタイヤの上のボルトを締め直していた。ほんに寿命



が縮んだ。

後ろの溪谷の上に白銀の山（*左がラカポシ、右がディランの南面）が見えだし、前方にナンガバルバット（世界第9位の高峰 8125m）が見えだした頃、ようやく谷は浅くなり、トウモロコシ畑が広がるようになる。南北に長いタトー村の、南端の横が終点。車道はさらに続いているのだが、土石流で塞がっているのだった。あんな絶壁道を維持、走行できるくらいなら、この程度の補修はわけもないように思えたけれど、ここからポーター仕事を確保するのが、村には好都合なようだった。

村人がワットとベイグさんを困らせた。雇われたのはあまり年端のいかない少年達で、ロバ2頭が補佐についた。

恐怖のジープ走行に比べたら、地に足がつくだけマシと思えたが、登り出すと暑かった。道はかつての車道で、それが徐々に森林地帯に入っていく。乾燥地帯では、標高が上がると気温が下がり湿度もあって樹木が育つことになるのだ。かつてはもっと下にも樹木はあったそうだが、それが伐採されると回復は叶わず乾燥地帯はさらに広がり、禿山を増やしているらしい。

トラバース路に入り、ぐいぐい標高が上がると一気に氷河が見えだした。岩屑に覆われた舌状のグレーゾーンがライコット氷河なのだ。氷河の両脇に残されたモレーンが針葉樹林帯となり、メルヘンの草原（メルヘンヴィーゼ）はその左岸側の台地である。もの綺麗なTSにテントとケビンが並び、その続きは牧場になっていた。舐めるように刈り込まれた敷地は、すべて家畜達の食んだ跡なのだ。氷河の上に聳えているはずのナンガバルバットは裾しか見えない。おぼろげな輪郭の小山の裏に、BCはあるようだ。

ケビンはトイレ付き、なしのレベルが混在するが、基本的にはツインで、ベッド2台が入った独立棟型である。こんな所の離れたシングル棟はちょっと物騒で、結局私は長岡ケビンに紛れ込み、片方のベッドを占有させてもらうことになった。一番高台にあり、氷河が真横に見えた。



食事棟のロッジには煌々とプロパンガス灯がともった。個人手配旅行とあって、日本食の副菜の数々は、長岡さん夫婦が買い揃えてきて下さった物。でも、ドイツ人テーブル、中国人テーブルも広がった中で、ジャパニーズテーブルが一番ライスが余っていた。何かと「慣れ」の余裕を自覚できた私も、「インディカ米」のみは拒絶が増幅。私だけではなく「何で日本人はお米を食べないのか不思議だろうね」と言いつつ、誰も次の「もったいない」が出てこない。珍しいならともかく、似て非なる物はかえって「違う！」が強調されて、食欲減退になるのが食文化。さらには「主食」の存在感かもしれない。一方完熟のマンゴーは、大好評だった。

◆8月8日 →タトー村→フンザ

今朝もナンガバルバットは見えない。時間は十分にるので、傘をさして朝の散歩にでかける。森林のモレーンの氷河側ははっきり切れ落ちて、どこからも氷河展望が広がる。道がモレーンの右にずれていくと、小川が流れる森林浴コースである。どこにも糞が落ち、そこらじゅうが緑のカーペット…過放牧で舐めるように食まれた跡の、掻き分ける丈もない草が延びている。メルヘンの草原というからには、高山植物が群れ咲いているのかと想像したが、食まれた。

た後にわずかに紛れ咲かせている程度だった。バイヤールキャンプと呼ばれるBCの手前にある、タトー村の夏村まで着いたが、やはり雲は重い。放牧の羊達が珍しげに近付いてき、その後は番をする子供の指示通り、木橋を渡って対岸へ広がっていった。

「孫悟空はお釈迦様の掌を越えられなかったということだけど、僕達は、家畜の領域からは離れられないみたいだね」と上村さん。圧倒的な自然の、そのとんでもない谷奥にも人は住みつき、家畜で舐め上げたような自然を広げているのだった。

下山は早い。ところが、一難去ってまた一難ともいえるジープは、タトー村からさらに徒歩一時間下までしか来ていないという。ベグさんがすれ違った人から、今朝の崖崩れでそうなったと情報入手したそうだ。「まだ1時間！」と村を見下ろすと、何と次々ジープが登ってきている。開通したのだ！こう簡単に開通して、一方目前に広がる土石流の方が除去不能な類の物とは思えなかったが…すべては人間様の知恵と都合なのであろう。

加速気味になる下りは余計に身震い物なのに、浮かれた運転手であった。礼子さんと私が思わずあげる悲鳴に、ニヤニヤと横を見るは、頷いて振り返るは…いかにも楽しげ。エエイ、ちゃんと前を見ておれ！

フウツとばかりライゴット橋（これも含め、多くの橋は撮影禁止）に着いた。さすがに、乗り換えてからのカラコルムハイウェイの凸凹は全く気にならなくなった。

ギルギットの外れで、コーチは突然停まった。「運転手さんの家です。」鉄門扉のある豪邸！奥さんと次々出てきた子供達が、何種もの果物の盛皿をにこやかに差し入れしてくれた。運転手は高給職なのだそうだ。

遅い昼食後（その結果、夕食は断る）、フンザ入りは夜8時になった。わずかな灯りの下でまたもジープに乗り換える。アルパインツアー社推奨の眺めのよいロッジということだが、地形はもうさっぱりわからない。悪路の巻は済んだと思っていたのに、またも会話のできないほどのロデオ走行。狭い石垣の間を抜け、真っ暗

闇を跳ね走り、このまま辺境でまとめて行方不明かも…の先にロッジはあった。意外に瀟洒で光あふれ、狐ならぬ、欧米人家族が遅い夕食をとっていた。トレッキングの汗と疲れ（ジープの埃も）が、快適に流れ落とせた宿だった。

◆8月9日 →ミナピン→ハバクンド

明けてようやく景色とご対面。緑のオアシスフンザ盆地が広がっている。でも山並の雲は重く、秀峰ラカポシも、時折右稜線を見せるだけだ。

昨日から、「この天気が続くなら、トレッキングをやめてハイウェイを北上するか」の次善策も浮上していた。「あと1時間もしたら、ラカポシが綺麗に見えるようになりますよ」と従業員。「じゃあ、晴れてくるのね？」と尋ねると小首を傾げる。パキスタンでは小首を傾げるのが“YES”なのだそうだが、サービス精神も考慮するとますます、え？どっちなの？

とりあえずYさんの高級高度計が、気圧の上昇傾向を積算表示しており、これが一番の判断材料となる。カラコルムのイメージ「抜ける青空」が見られますように…。予定通りのトレッキング実施と決まる。

出立の間際、長岡さん知己の画家に出くわした。「こんな所で！」と双方びっくり。辺境に長期滞在、そこでの景色をテーマにしている人で、日本では地図手配での接点があったらしい



。彼は「このところ、3日ごとに天気が変わるサイクルになっている。今日からはよくなるね」と言ってくれた。

昨夜、魍魎魍魎の入り口かと思ったこのホテルは、さらに増・改築されるらしい。立地は今朝ようやくわかったのだが、すぐ裏にビューポイントの砂岩（*砂のように風化した片麻岩）の丘があり、ほんの3分の登りで、360度展望とサンライズ、サンセットが楽しめるのだった。ベイグさんが「ギルギット泊、ここでサンライズを見るツアーもあります」と言っていた。桃源郷フンザは、世界の観光地になろうとしており、あの悪路も来年には補修されるとのことだった。

バルチット故城をまず訪ねる。石垣プラス木造りのそれは、長岡さんのかつての来訪時には倒壊寸前、端に寄るだけで揺れるほどであったという。それが世界遺産の指定を受け、観光資源として補修された。「スコシ、日本語ヲベンキョウシマシタ」の日本語ガイドが案内する。スコシというから、一生懸命聞き取っていると、出来のいい冗談になっていて、ガイドがニヤニヤ、ニコッと笑い返す。語学というとまず縦筋が寄る私には、コミュニケーションの道具じゃないか！と反省させられる一幕だ。風を招く夏の居間、こもって暖をとる冬の居間、他は多くが貯蔵庫だった。外の撮影なら可で、王様のベランダからの景色を欄干越しに撮る。

フンザ川の両岸に緑の台地。スラッと天空に伸びるのは細身仕立てのポプラで、その間には、リンゴ、アンズ、スモモなどの果樹がたわわの実を付けて木陰を作っている。どこにも水路が通り、氷河由来の、グレーの油膜を浮かべたような（*雲母片の反射によってそう見える）水が、ある所ではほとぼしり、ある所ではゆったりとこのオアシスを潤していた。

観光地化の以前から要衝の地であり、人の往来が多く、女性も多い。アレキサンダーの東征以来、金髪碧眼の美女が住みついた地とあって、「パキスタンでは女性を見かけない！」の上村さんも十分に満足できたよう。本当に美男美女が多く、そんな人達が颯爽と裾を翻し、ある

いはさりげなくベールを掛け直していると、もうエキゾチック！

日本にだって「夜目、遠目、笠の内」の言葉がある。ベールの内ならなお有利、想像を掻き立てるといふものだ。でも、礼子さんと私は冷静に達観したのだ…彼女達が当然のように鼻にひっかけるベールが、私達だと、絶対に留まりようのないことを…。メリハリのない顔とボディーの私達は、やはり「お着物」で頑張ることにしよう！

カラコルムハイウェイをやや戻り、南の脇道に入ってミナピン村。ここのロッジで昼食をとり、トレッキング開始だ。ロッジ庭にはナジール社からの天幕、テーブルなどの器材が置かれていた。あれよの間に村人が増え、食材類も山積みされた。今朝まで、次善策に変えるかの保留時間があつた。もし、トレッキング中止にしていたら、この器材の手配から食材はどうなったのだろうか？ベイグさんは、用意した食材はキッチンボーイ達が持ち帰り家で使うのだと言った。不測の事態があるのは当然としても…見えない所にも経費はかかっている。決して高いとはいえない旅費である。

やたら啼いている口バがいた。「イヤイヤ」としか聞こえない。ここでの荷役は口バだ。体高低く、パンダ目、大きな耳もあって見た目は可愛い。でもかなり強情そうではあつた。前回のシッキム報告の反響に「どのページにも糞の記述があるのに、映像には一塊も出ていない」の指摘があつたので、あえて転がりたてを撮影した。

コックとキッチンボーイの計2名、スタッフ2名、口バ6頭、ポーター19名が、今回のご一行様だ。村の灌漑用水脇を通り、崖を大回りして、氷河からの急流を渡ると、そこからモレーンへの急登が始まる。ポーターの少年達はごくごく普段着のまま、息を荒らせることもなく、抜き去っていった。ネパールにあつた表象物はなく、岩に書かれた蛇がのたくっているような文字（*ウルドゥ語）は、ロッジの宣伝のようだった。左に早くもミナピン氷河の末端が見えた。たかだか2500m。北面だからだろうか？

ここも次第に灌木が増え、樹高が高くなっていく。そして背後にバツラ山群の白銀の峰が伸び上がってくる。谷を詰めると、前にも後ろにも白銀の山塊…の展開がカラコルムかもしれない。U字谷を詰めて、両脇に大山塊のエベレスト街道とは、また違う…いやいやもっと登ってからじゃなくちゃ、そんなこと言えないよ！

日差しはますます強く、濃い影に汗がしたたる。トレッキングの方を選択してよかった！ようやく平らになった牧草地に作られた日陰に、コーラ壺が飾られていた。そこにいた10才の少年が「25ルピー」だという。首から下げた財布から慎重に数えておつりが出てきた。いくらが入るものか…。この小遣い稼ぎを済ませたら、さっさと麓の村に帰りたい。そこにいた4人の女の子達は、飴を上げても撮らせてくれなかった。ダメダメと手を振り、「キャキャッ」と、石垣の掘立小屋に消え失せた。残念と思う自分と、そうであり続けてほしい自分がある。

夕暮色になった空に赤い小旗が翻る。その木の下付近がハバクンドで、もうテントが設営されていた。TS端にトイレ小屋があり、便器とチョロチョロホースが引かれていた。「ベルクハイム並みよ！」で通じるのが、今回のPW。

ホテルコックの経験もあるというスタッフ達はとても料理上手。スープも、ヌードルもおいしくて、ロッジ以上。ただ今回は、不覚にもお腹までリラックスしてしまい、あまり手が伸びなかった。シッキムから3カ月内で高山病の心配なし（順化は3カ月有効とか）と思えば、今度は下痢…こんな煩いなしで、楽しめるものならいいのに…。(*さらに、メルヘンの草原で高度順応をしたことになる)

トイレに行っている間に茜色が消えて、薄闇が広がる。と、「ンガ〜、ンガンガンガ」の咆哮。向かいからも「ンガ〜、ンガンガンガ」、あっちからこっちから谷間中が咆哮で埋まった。ロバがこんなに咆えるとは知らなかった。ロバと分かっているからいいものの、姿が見えなかったらおじけづくほどの迫力。首を伸ばし腹を震わせ、全身共鳴させて咆える。知らないことっていっぱいあるんだ…。



◆8月10日 →タカファリBC

モーニングティーと洗面用お湯が配られる。空は青い。谷間のテントサイトは日陰になるが、出立の頃には日が当たり始めた。前方のダム状のモレーンの上がもう大氷河で、右をトラバース気味に登るといふ。谷間の樹林を抜けるとすぐ広い牧草地となり、そこからの斜面も、時折樹木があるものの、なだらかな斜面の牧草地だった。一般の人はネパールだ、カラコルムだということ、どんな崖っ淵を歩くのかと思ってしまうようだが、実際は、牛、馬、ロバが荷役して往来する道を歩いているにすぎない。その道の標高が高いだけで、7000、8000mの巨峰が見える所が、トレッキングの対象地となっている。日本の山より、荷物を持ってもらえるからかえって楽という人も多い。とてつもない巨峰が見える、見たい、撮りたい…が、辺境のトレッキングである。

74歳のYさんはJICA海外体験も豊富で元気だが、さすがに登りは止まりがちになる。慣れたガイドのベイクさんは決して叱咤激励しないが、後ろで手持ち無沙汰気味の私達に、「左端に行けば、氷河が見えますよ」と言った。ホント？とばかり左岸へ駆け上がると…ウッソー！！の景観。うねうねと流れるまばゆい氷の大河が白銀の大屏風から流れ落ちていた。「スゴイ！」以上の声にならなくて、上村さんには只

只、指さすだけ。上村さん、礼子さんからも次々歓声が上がった。当然の景観のように、長岡さんはカメラを広げていた。「ウヒヤ〜」以上にならないまま、シャッターを切る。これが氷河…ギシッ、ギシッの音も聞こえはしないが、うねり、裂け、はじけ上がったままの塊から、冷風が吹き上がってくる。せいぜい標高3200m。それでこんな大氷河を見られるのがカラコルム！

ざらざらのモレーン壁をしばし歩いてみた後は、よそ見しても安全な登山道に戻る。陽光を浴びるこの壁は、紅色のムカゴトラノオや紫のフウロ、サクラソウやツメクサ類のお花畑になっていた。わずかの距離で広がっていく視界…右端にラカポシ本峰（7788m）が出てきて、左端にはディラン（7273m）が端正な逆さ扇を広げ、ついに大ミナピン氷河がその全貌をさらけ出した。

登りつめて大休止。背後のバツーラ山群の方もニョキニョキと大岩壁を広げている。青、緑、白の世界に浸りきって至福の時間が流れる。何といったってここまで来なければこの景色は見られない。ロバ達はここで荷解きされて、食事タイムになっていた。ここからしばらく歩幅分だけの崖になっていて、荷を担いだままでは家畜は通過できないのだった。究極、人間様がどこでも通用するポーターなのだ。彼らは2往復してここを通過し、その先、モレーンの陰に、真っ平らなタカファリBCがあった。蛇行して水路が流れ、トイレ棟が建ち、空荷で通過した家畜達がのんびり草を食んでいる。

テントからはモレーンが長屏風となって、かの大景観も上しか見えない。ほんの一登りで、モレーン上。これでもかとはばかりにズームを変え、レンズを交換し、偏光フィルターもつけて写真を撮りまくった。雲が湧いた、影が変わったとさらに撮った。ディランからラカポシにつながる大稜線に数々の魅惑的ピークが見えるが、名前はついておらず、誰も縦走はしていないという。しかるに、氷河の対岸の5400m峰はプラス5日で、トレッキングの範疇で、ピークハントできるとのことだった。いえ、もう眺めるだけでいいです。

タカファリの平原をさかのぼっていくと、雪渓からの末端は湿地状になっており、ウルップ草に似た花が繁茂していた。

OB定番のお茶を点て、証撮写真を撮り、もてあます時間をロバと戯れる人、キッチンを観察する人。十分に時間をかけて作られた夕食はまたまた豪華献立。トマト、キュウリ、紫オニオン、ニンジンがきれいに飾り盛りされて、シッキムの時とは比べ物にならない。次々出てくる料理の皿は、山中の料理と思えないほど。味も、繊細で押しつけがましくなかった。しかし、しかし…なのであった。美しいパキスタン青年がピツタリ給仕についてくれているというのに、食は進まない。申し訳ないほどに食事は余り、下げられていった。あれはポーター達が食べてくれるのだろうか？

そういえば夕食前にちょっとした騒動があった。ポーター達が、久しぶりに羊を食べたいと要求したらしく、ベイグさんは「高い」と即、却下したらしい。目の前の羊？目を丸くしていると、彼らはそんなことはお手の物で、さっと首を刎ね、皮を剥ぎ、さばいてしまうとのことだった。隈無く牧草地となったこのあたりに有害獣は見当たらない。一番の敵は、<うまそう！>と思う人間なのかもしれない。勝手に遊び勝手に帰っていく家畜達だが、現実にはどんなルールが敷かれているものか、一介の旅人には



感知できない。

見上げるモレーンにいつも留まっているロバがいた。案の定、夕暮時に「ンガー、ンガンガン」が始まった。別のが啼くというより、エコーが戻ってきた。シルエットで浮かぶそれは、首を伸ばし、腹を波打たせてラッパになりきっていた。

◆8月11日 →ミナピン→ギルギット

朝焼けのラカポシを撮る。朝食前に背後の尾根へお散歩。ずいぶん高く見えたが、ベイグさんの言う通り、30分で到着した。標高を上げた分、ミナピン氷河がさらに奥行を増し、ラカポシの別の氷河が見え、テントサイトが見下ろせた。尾根上にも家畜達の跡があったが、さすがに踏まれていない急斜面の方は高山植物が豊かだった。ここ(3650m)が今回トレッキングの最高地点で、あとはひたすら日本への帰路になる。長岡さんは、デジカメ、モノクロ、大判カメラをも総動員しており、「先に行って」と、とことん撮影を決めたようだった。

あまりに姿が見えなくてベイグさんは気掛かりそうだったが、妻は「毎度団体行動のとれない人ですから、お構いなく」と言い、上村さんは「学生時代からそういう奴でしたから」とアハハ…になった。そんな気楽だった現役時代から30年も過ぎて、今、カラコルム山中でこうして遊んでいるなんて、信じられない…。

(間延びする帰途は省略。8月15日帰国)

◆エピローグ

高度障害の心配もなく楽しめた氷河ウォッチング。こんなお誘いをもらわなかったら、生涯ご縁のなかった大パノラマだった。

「せっかくの休日を、私達のカラコルムデビューのために、「再訪」に潰してもらって…」恐縮する私達に「私も、初めてだったんですけど」と長岡さん。なんと、見てきたようなコース説明から、「ここからは氷河が見えてきました…」の詳細なガイドの数々はすべて、読図と予習の賜物だった。もちろんカラコルムハイウェイは7度目(5年前のバルトロ氷河トレッキングなど)。そのために「前に来た時は…」発

言が随所に混じった事による誤解もある。しかし、「既存の2つのトレッキングコースの、よいところ取りをして企画した」今回は、楽なこともあって、いつか家族と一緒にの時にと除けて温めておいたコースであつたらしい。

何時間もじっと地図を眺め、資料も集めて予想をたて、現地へ行って実際の景観を楽しむ…その精進の結果の、あまりに滑らかな解説。そのため、あとの全員が最終日まで「ご当人には犠牲的な(かつ、きっと家族に対しては積年の我儘お詫びも兼ねた)再訪」だと思い込んでしまっていた。さすが、元国土地理院地図部長のケタ外れの實力!

(*この箇所には「持ち上げすぎでは」の指摘がありました…)

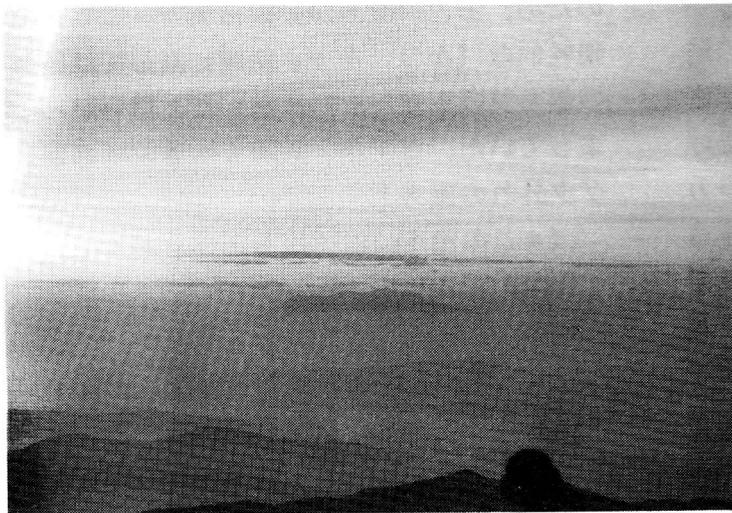
さて、こうして旅行記を打って、必然で資料を確認していくと、「既存の2コース」というのが、アルパインツアーカタログのカラコルム定番コースであつたこと、個人手配なら考えられなくもないドッキングであつたことが、「コロンプスの卵」的に分かります。同時に、その周辺ページのガイドが、容易に解説できるようになっていることにも気付きました。それこそが「カラコルム入門コース」の意味でありました。

あらまほしき先達の長岡先輩からは、「見てきたような解説」までできる可能性を、こんな30年後にも学ばせていただきました…が、そんな能力もなく、興味もなく、そのくせ先入観・雑念・妄想まみれの凡人の場合、「百聞一見にしかず」こそが、凌駕できる(?)裏技です!自分の五感を震わせてくることです。そうすれば、あるのかな?の第六感、第七感もきっと共鳴してくることでしょう…あのロバみたいに。

2~3年後、また、こんな楽で、お得(=2回分のいいところ取りのような→半額で済む→時間も節約できる)なコースを企画して下さい。もちろん「見てきたような解説」付き。KUWV・OBならではの役得と申せましょう。是非、資金を貯め、そこそこに体力を維持。周囲に十分な根回しを図っておかれるよう、お薦めします。

- 完 -

2005年の夏 白山



御岳遠望



剣峰越しの御来光



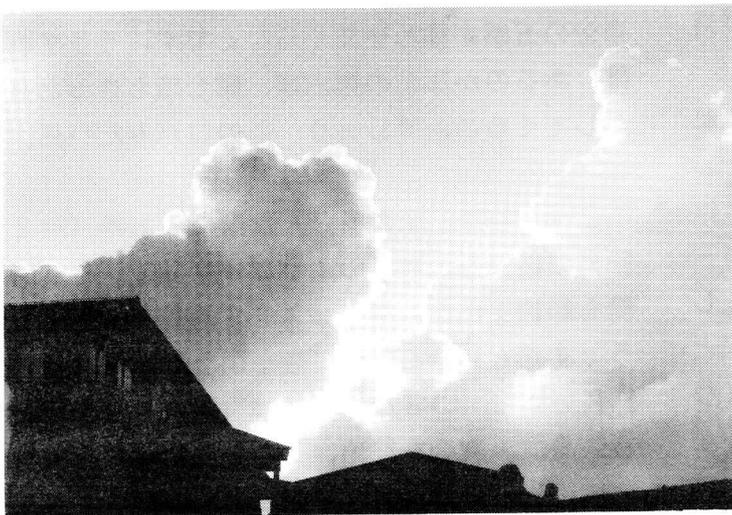
ミヤマキンポゲ



ミヤマリンドウ



別山



室堂 (下:イブキトラノオ)

